



Tokyo Gakugei University Repository  
東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	宮沢賢治 像の生成と受容の変遷をめぐる文化研究(全文の要約)
Author(s)	構,大樹
Citation	
Issue Date	2017-03-23
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/147694">http://hdl.handle.net/2309/147694</a>
Publisher	
Rights	

## 〈宮沢賢治〉像の生成と受容の変遷をめぐる文化研究

R12-4003 構大樹（かまえ・だいき）

本論は宮沢賢治の生前から現代に至るまで継続的に行われている〈宮沢賢治〉像の生成と受容を通時的に分析し、その変遷を歴史的に跡づけることを目的としたものである。その際に重視したのは、賢治受容を現象させる要因を、社会・文化状況＝環境の側面から明らかにすることであった。すなわち、生前においては一握りの人に知られるばかりだったとされる作家のテキストが、その死後ながく受け入れられているのはどのような理由からなのだろうかという問題を、各時代の〈宮沢賢治〉をめぐる言説編成のプロセスに焦点を当てることで、受容の軸と定式化の形成プロセスと再生産のシステム、およびそれとの関係性のなかで成立していく受容の様態を分析したのである。

第Ⅰ部では、〈宮沢賢治〉に文学的価値が認定されていくあり様を、賢治生前からアジア・太平洋戦争の終結までの文学をめぐる言説空間から跡づけた。

生前期の賢治は『春と修羅』の出版（1923）、詩誌『銅鑼』での作品発表によって、革新的な表現を用いる新進詩人〈宮沢賢治〉として、若手を主とする一部の詩人から期待を寄せられていた。さらにこの革新的な表現という評価軸は、当時、民衆詩との対立を意味し、ゆえに賢治の名は反詩壇的な詩人イメージを帯びることに繋がった（第1・3章）。このような詩人としての出発時に抱かれた期待は、賢治が作品発表を中断しても、なお途切れることはなかった。これは、草野心平や母木光が「公器的詩雑誌」の役割を担った詩誌のなかで、賢治テキストの表現に価値を認める論評を断続的ながら載せたことで、詩作の中断の穴が埋められたことに起因する。賢治は最晩年において、作品発表を再開する。そして発表されたテキストは、既存の詩を揺さぶる詩作を、今後行っていくことの表明として捉えられ得るものであった（第2章）。

賢治生前期に抱かれた期待は賢治追悼期（1933～1935）になると、文芸復興期の文学場で活性化していた、作家の生活を文学テキストの価値に組み入れる評価の枠組みのなかで言い直された。没後直後、〈宮沢賢治〉に関しては、『宮沢賢治追悼』や草野心平の花巻訪問を通じて、豊かな実践に貫かれた“生活者”という情報が新たに発信されていた。そうした情報が文学場の言説と結びつけられ、〈宮沢賢治〉の真価として称揚されることになったのである。これによって生起した肯定的な評価が、追悼期における新たな読者の獲得へとつながっていったと考えられる。今日まで引き継がれる倫理的・思想的モデルとしての〈宮沢賢治〉は、追悼期において賢治が優れた作家であったこと語るべく、文学場の

「今・ここ」の問題における損失としてアピールすることが目指された結果、生前期の革新的表現者のイメージを転換させ、“生活”を前提とする〈宮沢賢治〉の評価方法を確立させたことで生じたと言える（第3章）。この意味において、定式化された〈宮沢賢治〉の始まりは追悼期に求めることができる。

ところが、同じく追悼期において「発見」された「雨ニモマケズ」の位置は、当時の賢治テキスト群のなかで必ずしも優位にあったわけではなかった。賢治テキスト群の内部における序列に大きな影響を与えたのが、大政翼賛会文化部編『詩歌翼賛』第二輯（目黒書店、1942）であった。戦時下の文学場は、「素人の創作」に特権的な文学的価値が付与される言説が編成されていた。と同時に、「素人の創作」は素朴・誠実さが評価軸として機能したことで、本来は公表される予定のなかったテキストに、文学的価値を見出す動きもあった。こうした“素人性”“私事性”という同時代的な文学的価値が、〈宮沢賢治〉の価値を高揚させ、さらに「雨ニモマケズ」の特権化をもたらしたと考えられる。賢治の“生活”の一つとして示されていた農村活動は、すでに松田甚次郎などの言表行為によって、あたかもそれが主であるかのように強調して語られていた。加えて「雨ニモマケズ」は、作者の到達点を読み解くための“私事性”の高いものとして位置づけ直された。ここにおいて、「雨ニモマケズ」を中心とする〈宮沢賢治〉が成立し、同時代的な文学場のなかで高く評価されるという事態が生じることになったのである。この成立要件には、民衆を戦争と関連づける総動員体制から要請された“朗唱性”と“滅私奉公”が、「雨ニモマケズ」に認められたことも深く関係している（第4章）。さらに、こうした価値編成は、満州開拓青年義勇隊の教科書への「雨ニモマケズ」採用を生じさせてもいた（第5章）。

第Ⅱ部では、戦時下において優れた作家として認定された〈宮沢賢治〉が戦後、学校教育を介して広く定着した理由を、国語教育界の動向から明らかにした。

終戦直後、賢治テキストが教材化された理由としては、戦時下において早くも、青年教育に資する教育的価値が認められていたことが挙げられる。しかも満州開拓青年義勇隊の教科書には「雨ニモマケズ」を、「皇民」意識を過度に煽らず、かつ同隊の成員を集団としてまとめあげるため選定された形跡が看取される（第5章）。すると、戦時下における〈宮沢賢治〉の教育的価値とは、国体イデオロギーの周縁で生じていたということになる。また戦時下における賢治受容を覗き見ると、〈宮沢賢治〉に青年教育だけでなく、今の区分で言えば初等教育の段階における教育的な価値も生じていたことが分かる。これは、児童文化の領域から見出すことができる。賢治童話は劇団東童による再創造を経ることで、子どもの実態に沿いながらの啓蒙が目指された生活主義の文脈で高く評価されるようになっていた（第6章）。

以上を確認することで、戦時下においてそうした言説が編成されていたからこそ、戦後、逼迫した時間のなかで、過去の文学的遺産から「今・ここ」に適う教材となるテキストが採られたとき、賢治テキストは目にとまりやすい位相にあったと考えられるようになる。加えて、戦時下における〈宮沢賢治〉の教育的価値をめぐる言説編成は、戦後の教師に対する利点を生じさせたことも推測される。終戦は教師に、子どもたちの前で戦時のあり方を自己批判し、戦後の「今・ここ」を称揚するという苦痛をとまなう振るまいを求めた。しかし〈宮沢賢治〉の教育的価値は国体イデオロギーの周縁で生じており、よってあたかも以前から認めていたと語ることは、戦中・戦後の一貫性を示す自己弁護となり得た。また国定教科書での教材化も行われていたことから、戦後民主主義を中心とした言説空間のなかでの、語ることの信頼性を帯びていた。ここにおいて、戦後に〈宮沢賢治〉を語ることには、信頼性と安心感が生じていた。ゆえに、それが一つの起因となって、〈宮沢賢治〉は戦後教育のなかに溶け込んでいったと考えられる（第7章）。

こうして戦時下に端を発する「雨ニモマケズ」を中心化した〈みんなの幸いを願い行動した人物〉という賢治イメージは、戦後の国語教育の中で違和感なく再生産されるようになり、あるいはそのイメージこそが〈宮沢賢治〉を教えるにあたって求められることになっていく。このことは、妹の死を題材とする「無声慟哭」詩群において、「松の針」ではなく「永訣の朝」が定番教材化したことから窺える（第9章）。

もっとも、教育言説は一定ではない。国語教育においては1960年代後半に、「大きな物語」の後景化を受け、学習者が理想的な社会集団の成員となるよう「主体変革」を促すという教育理念が表面化できなくなり、代わって学習者の技術・能力の向上に資する教育を押し出す重要度が増した。経験主義から能力主義への推移である。にもかかわらず、「雨ニモマケズ」を前提に教育的価値が生じた〈宮沢賢治〉が、依然として学校教育場に受け入れられたのは、賢治テキストに能力主義的な教育観との重なりが発見されたためであった。このことは「やまなし」をめぐる言説より浮上する。

小学校国語教育において「やまなし」の教材化に早くから熱心であったのは、西郷竹彦である。彼は「関係認識・変革の文学教育」論という「主体変革」と明確な指導法というハイブリットな理論を主張し、そのなかで「やまなし」の有用性を説いた。「やまなし」は、経験主義と能力主義の両面を含み込んだ理論を際立たせるために着目されたのである。さらに後者の側面での有用性は、向山洋一が自らの立場・指導法を誇示すべく、教師全体の力量を測る場＝試金石として定位したことで、その印象を一層深めることになった。これによって1980年代以降、現在にいたるまで、「やまなし」は教師にとって「興味深く、心惹かれる作品」となったと考えられる。またこのことが、「やまなし」と同様の性質を持つ賢治テキストの発掘へと繋がっていき、賢治が教育観の変遷のなかでも「定番作家」として、揺る

ぎない地位を獲得することになったと言える（第9章）。

第Ⅲ部では、文学場で価値が定位され、学校教育場がなかば強制力をもってそれを再生産することで潜在的な享受者の数が増加していった〈宮沢賢治〉が、現在どのようにして受容されているのか、その一端を明らかにすることを目指した。

ポピュラーカルチャーの領域に目を移すと、1980年代から「雨ニモマケズ」を中心とする〈宮沢賢治〉から距離のあるイメージ生成が見受けられる。この領域のテキストで〈宮沢賢治〉が生成されるのは、学校教育場による賢治受容が、〈宮沢賢治〉に公共性をもたらしているためである。また、新しい〈宮沢賢治〉の生成は、学校教育場が繰り返し「雨ニモマケズ」の〈宮沢賢治〉を提供するため、逆にその反動として、別の側面に光を当てることで意外性という価値を生起させようとする動きと捉えられる。たとえば「永訣の朝」をめぐっては、国語の授業において倫理的・思想的モデルとして取り扱われるため、かえって〈宮沢賢治〉に「いもうと」への執着という観点が付け加えられたと思われる。ゆえに『上弦の月を喰べる獅子』（早川書房、1989）などポピュラーカルチャーのテキストで、男女の恋愛に似た関係として読み換えられる事態が生起している（第9・10章）。

もちろん倫理的・思想的観点からの賢治受容は、1980年代より後も続いている。「雨ニモマケズ」の中心とする〈宮沢賢治〉が定式化されたことで、やはり享受者がそれを無視できなくなっているためである。しかし「グスコブドリの伝記」の再創造の例が示唆するように、そこには生き方の模範としての受容から、生き方を考えさせる触媒としての受容といった推移があると観察される（第11章）。これも「大きな物語」の後景化にともない、「今・ここ」で〈宮沢賢治〉を語ることの価値の模索と捉えられる。そうした受容は、アニメーション映画『グスコブドリの伝記』（杉井ギサブロー監督・脚本、2010）でも認められる。けれども、東日本大震災以後、ふたたび〈宮沢賢治〉は倫理性を強めている。「絆」「つながり」がキーワードとなる言説空間が立ち現れたためである。この動きは、歴史的には〈宮沢賢治〉の拡張に対する揺れ戻しとして位置づけられる。この揺れ戻しを生じさせたのも、学校教育場が長期間〈宮沢賢治〉を教材として取り扱ってきたためである。定式化された〈宮沢賢治〉の再生産と、それにとまなう公共性の付与が、そうした受容の再帰を容易にしていると考えられる（第12章）。